

【実践報告】

ボランティアを通じた社会人基礎力の育成

地域の子育てと放課後の子どもの学びを支援する

白村 直也¹⁾，吉田 敏¹⁾

¹⁾ 岐阜大学教育推進・学生支援機構

要旨

本実践報告は、2018年度に岐阜大学学生ボラネットが行った活動を、社会人基礎力育成グランプリ（主催：社会人基礎力協議会）で発表するまでのプロセスを書き留めたものである。学生ボラネットは活動を始めるにあたって、①働きながら子育てをする親の経済的、精神的負担を減らすにはどうしたらよいか、②2020年からの小学校でのプログラミング教育必修化を前に、小学生にプログラミングに慣れてもらいたい、の2点に重点をおき話し合いを重ねた結果、小学生向けのプログラミングに関するイベントを開催する運びとなった。イベントの開催に当たっては、イベントの準備はもとより、企業への協賛依頼も学生が積極的に執り行った。イベントは好評を博し、2018年度社会人基礎力育成グランプリ地区大会では奨励賞を受賞した。

キーワード：ボランティア，基盤的能力，社会人基礎力，プログラミング教育，小学生

1. 序：学生ボラネットが行うボランティア活動の特徴

岐阜大学では、生涯にわたって社会で高度な専門職業人として活躍するため、学生に身につけて欲しい力「基盤的能力」＝（「考える力」「伝える力」「進める力」）を掲げている。

学生ボラネットは、学生自らが企画したボランティア活動を通じて「基盤的能力」を身につけるものであり、その成果をもって地域社会（自治体を含む）が抱えるニーズを充足しようと努めている。またボランティア活動は、学生のキャリア形成（社会的・職業的な自立）を促すものとして位置づけられている。

岐阜大学
学生ボラネット



図 1. 学生ボラネット
パンフレット表紙

ボランティア活動といえば通常は、外部から寄せられるボランティア募集を閲覧し、自己の興味・関心に応じて応募、そして参加する手順を踏むのが一般的である。だが学生ボラネットが取り組むボランティア活動は、パンフレット（図 1）を著者が授業などで配布してメンバーを募っている。2018 年 4 月の時点では、全学部から 10 名が参加した。

各自が自己の興味や関心を話し合い（岐阜大学の基盤的能力という「考える力」）、企業や自治体など関係機関の協力を積極的に仰ぎ（同「進める力」）、活動のプロセスや成果を行政や関係者にフィードバックする（同「伝える力」）ことに大きな特徴がある。

2017 年度学生ボラネットは、同年「岐阜大学活性化経費（教育）」と「基盤的能力を育成する学生支援プロジェクト事業」の採択を受けることで活動を開始した。

2. 岐阜大学「基盤的能力」と社会人基礎力

経済産業省が2006年に提唱した「社会人基礎力」は、「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」の3つの能力（12の能力要素：図2参照）から構成されており、職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力を指す。

学生ボラネットが今年度の活動の一つに位置づけた、「社会人基礎力育成グランプリ（以下、グランプリと記す）」は年一度開催され、地区予選大会（岐阜大学は中部地区に属する）と、全国大会の2つから構成されている。大学ごとにチームを組み、地区予選大会を勝ち抜いた上位の大学が全国大会に駒を進める。

グランプリで問われるのは、各大学チームが設定した課題の解決において、学生の「社会人基礎力」がどのように育成されたか、という点である。この「社会人基礎力」で示される12の要素能力のうち、ストレスコントロール力や柔軟性などの要素は、岐阜大学の「基盤的能力」には直接には含まれていないものの、「基盤的能力」中の論理的思考力は、「社会人基礎力」でいう「考え抜く力」や「計算力」に重なる部分もある。

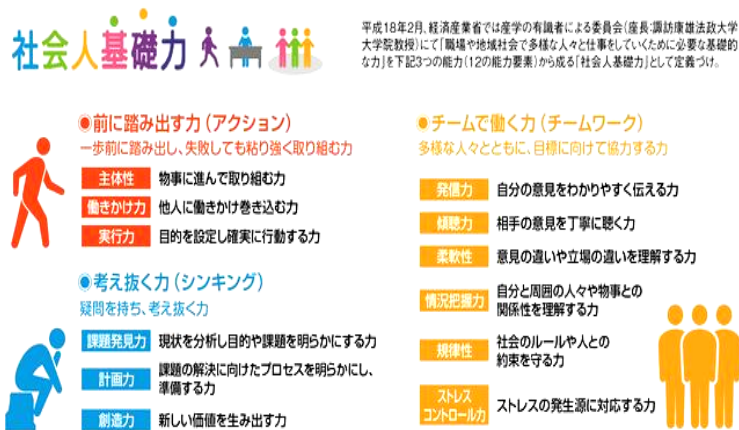


図 2. 社会人基礎力が掲げる 3 つの能力と 12 の能力要素

また、「社会人基礎力」が「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」としている点で、岐阜大学の「基盤的能力」に足並みをそろえる部分も多く、学生の取り組みの成果を広く社会に向け発信する機会としては相応しい。

したがって、今年度の学生ボラネットは、このグランプリへの参加を通じて次のような教育目的の達成を目指した。

- ①中部圏（地区予選大会）や全国の大学（全国大会）の学生と知見を交わすことで、他大学の取り組みや学びを知り、より広い視野から岐阜大学での学びを振り返る。
- ②キャンパスを飛び出し、未知の場でプレゼンをする機会を持つことで、学生同士の協調性や計画性、役割を担うことの責任に緊張感を持たせる。

3. 取り組み内容とその成果

活動計画について

具体的にどのようなスケジュールで、活動が進んでいったのかを述べたい。下の表は、2018 年 12 月のグランプリに出場するまでのスケジュールである。2018 年 4 月にメンバーが初顔合わせの機会を持ち、各メンバーが自己紹介などを行った。その際グランプリ出場に関わる要件説明や、大まかなスケジュール決定をした（表 1）。

表 1. 学生ボラネットの活動スケジュール

	学生ボラネットの活動	社会人基礎力育成グランプリ関連
2018 年 4～5 月	・学生ボラネット学生委員顔合わせ	2018 年度募集要項決定（中旬）
6～7 月	・地域が抱える問題の調査	募集要項のインターネット公開
8 月	・フィールド調査、企画立案、計画策定	
9 月	・企画の実施	
10 月	・学生が企画した計画に沿って活動	出場エントリー（月末締切）
11 月	・逐次振り返りと軌道修正	
12 月	・グランプリ出場テーマを決める	中部地区予選大会（上旬）
2019 年 1 月	・学内成果発表会の準備（下旬）	

	・学内成果発表会（下旬）	
2月	・一年間の取り組みを振り返る	全国大会（予選大会上位通過校）（中旬）
3月	・報告書の作成と印刷 ・関係各所に発送	

イベント企画・開催の決定：なぜ、今「子育て支援」と「プログラミング」なのか

今年度の学生ボラネットは活動の始めるにあたり、①働きながら子育てする親の経済的、精神的負担を減らすにはどうしたらよいか、②2020年から小学校でプログラミング教育が必修化される前に小学生に少しでもプログラミングに慣れてもらいたい、また放課後の時間を有効活用してもらいたい、という2つの問題意識がメンバーに共有されていた。

2つの話し合いを重ねた結果、「子育て支援」と「プログラミング」をキーワードに、学生主体によるイベントの開催に至った。

全国的にも、子育てをしながら働く親をめぐる環境の改善が叫ばれている。たとえば2018年2月4日朝日新聞は「放課後児童クラブ（学童保育）を利用できない子どもが増えている！ 岐阜県内で小学生の『待機児童』が急増」と銘打ち、「県内では前年度より7割以上増えて164人となり、全国では約1万7千人。自治体は受け入れ態勢の拡充を図っているが、追いついていない」と報じている。また岐阜市では、2018年6月2日の朝日新聞が「母親たちが民間学童保育所を開所」という記事でもって状況を報じている。記事によれば、2014年度に2,144人だった学童保育所の定員を、今年度は3,007人に増加するというのである。市が把握していない「潜在的」な待機児童も含めるとニーズはさらに増えるという。

学生ボラネットでは、教育学部の学生が事態の深刻さを他のメンバーに訴えたことから、この問題についてメンバー皆が関心を持ち、「小学生は放課後に何をしているのか」「その時間を有効に活用できないか」「保護者の精神的・身体的負担を減らすことはできないか」そして、「小学生のためになることはなんだろう」という話し合いが行われた。

学生ボラネットでは、ボランティアとして子育てを支援するにあたり、①極力長く続けられる支援であること、②学生にとっても精神的・身体的負担になり過ぎない支援、の2点を基調として意見がまとまった。

また、「待機児童」をはじめ、小学校をめぐる現状を調べる中で、2020年からプログラミング教育が必修化されることも知った。このような経緯があり、「子育て支援」と「プログラミング教育」の2つのキーワードを軸としたイベントの開催を企画するに至った。

岐阜メディアコスモスでのプログラミングイベント開催

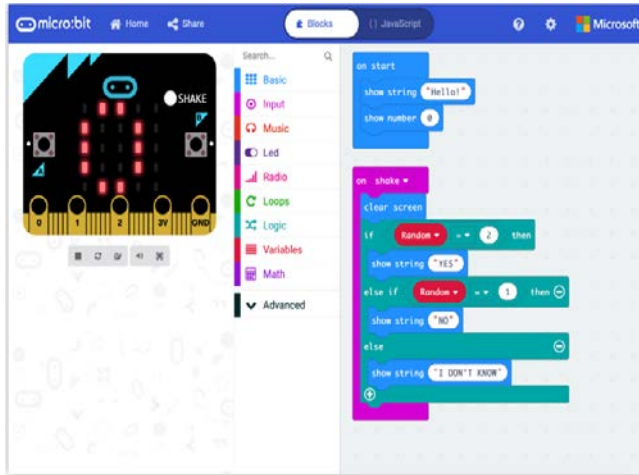


図 3. パソコン画面に映したプログラミング画面

イベントを開催するまでの活動は、①誰を対象に何をするのかのイベントの具体的な内容決定と、学生自身のプログラミング習得、②パソコンとプログラミング機材などの機材の用意と会場設定、③イベント広告の作成と配布と参加の受付、④当日の会場設営、の 4 つのフェーズに分けられた。

①については2020年のプログラミング必修化に伴い、小学校でどのような内容とレベルが教えられるのかを調査することから始まった。学生の中にはプログラミングの経験がない者もいたことから、参考書を入手して試しに各自プログラミングで作品を作り、それを見せ合うなどスキルの向上を図った。

②では富士通株式会社の協力により、ノートパソコン 20 台の貸し出しを受けた。プログラミング機材（マイクロビット micro:bit）については、イベントの定員 20 人を想定し用意した。マイクロビットとは、パソコンに接続し、ウェブブラウザ上でロボットから楽器まで、あらゆる種類の作品を作るためにプログラミングができるというものである。何かしらのソフトをダウンロードする必要がなく、非常に扱いやすいとのことで今回採用をした（図 3）。



図 4. イベント開催の広告
(チラシ)

③については、学生たちが広告（チラシ）を作成した（図 4）。デザインやレイアウトなどは学生同士で話し合い決めていったようだ。広告はカラーで印刷し、岐阜市内の小学校に郵送で配布した。参加希望者はチラシに掲載した連絡先（キャリアセンター）に電話をしてもらうようになっている。ちなみに定員は各回 20 名としたが、定員に満たない場合は当日の飛び入り参加も可能とした。

④の会場設営は、開催当日まで使用機材を岐阜大学で管理し、教員が当日車で搬入、開催時間までに学生皆で協力し合い機材の設定を執り行った。

2018 年 9 月 23 日（日）と 10 月 7 日（日）に小学校 4～6 年生向けのプログラミングイベント「発明家になってみないか？ プログラミングをしよう！」を、岐阜市

メディアコスモスの「かんがえるスタジオ」、「おどるスタジオ」にて開催した。

より多くの小学生に参加してもらいたいと考え、3つの時間帯を設定した。9月23日は10時から12時と、15時から17時の2回開催（参加ボランティア学生4名）。10月7日は16時から18時の1回の開催となった（参加ボランティア学生4名）。イベントに参加した岐阜市内の小学生は、それぞれ15名、9名、そして11名であった。当日はノートパソコン20台をインターネットとプログラミング機材に接続し、小学生に1人1台のパソコンを用意した。

イベント当日は週末ということもあり、会場のメディアコスモスは非常に賑わった。50人程度を収容できるスタジオには、開場以前から保護者に付き添われた小学生が何人か待っていた。あらかじめ参加者名を記入していた名簿をもとに、学生が席まで案内する。小学校の行事で参加をキャンセルする小学生も何人かいたが、おおむね予約をしていたほとんどの小学生が参加してくれた。キャンセルの分、定員にやや余裕があったため、各回、当日の飛び入り参加を受け入れた。

パソコンに触れたことがない小学生もいるだろう、と学生があらかじめ分かりやすい参考書を工夫しながら作成してくれていたため、小学生1人に1部配布し、それを参考にしながらイベントは進んだ。およそ小学生2～3名に1人学生が付き、質問に答えながら、また実際に実演しながら予定していたプログラミングモデルを作り上げていった。

開場の雰囲気を見ながら司会の学生は適度に休憩時間を入れ、予定時間内に全モデル作成は修了した。各回の最後には保護者と小学生向けにアンケートの回答をお願いしたが、保護者からは「市内にはいくつかプログラミングの塾があるが高額」、「プログラミングイベントにはいつも予約が殺到、費用もかかるので助かる」、そして「継続的なイベント開催を期待する」という意見が記されていた。

4. 2018年度社会人基礎力育成グランプリへ出場

2018年12月2日（日）、椋山女学園大学において社会人基礎力育成グランプリ中部地区大会が開催された。このグランプリは社会人基礎力協議会が主催、経済産業省が共催として関わるものである。今年度は中部地区6大学から9チームがエントリーし、自分たちの取り組みをプレゼンした。プレゼンは14分を持ち時間とし、冒頭に指導教員がグループの簡単な取り組み内容の紹介、取り組みの評価（前に踏み出す力、考え抜く力、皆で働く力を軸に）を4分で話す。その後10分が学生によるプレゼンである。

私たち岐阜大学のグループは4番目であった。発表前に他大学の取り組み発表を聞き、大きな刺激を受けた後の発表であった。本稿には写真を掲載することはしないが、当日使用したパワーポイントスライドのいくつかを掲載しておく（図5から図10）。

プレゼンの最後に、このプログラミングイベント開催を通じて自分たちの社会人基礎力

がどのように養われたかについて報告した。まず、「前に踏み出す力」については、これを「実行する力」と解釈し、「世の中の問題に対して改善・解決への道筋を立てたとしても、実際に行動しなければ変わらない」と学生は述べ、今回のイベント開催までの自分たちの活動力を評価した。

「考え抜く力」は、自分たちが「できること」に縛りを持たせず、柔軟かつ真剣に考えることで、可能性や活動の幅が広がったと、「限界を決めないこと」の大切さをアピールした。

そして「チームで働く力」については、企業の人や、異なる学部で学ぶ者同士が集まって情報を交換し、計画的にイベントを進めたことで、「企業、仲間と共に働くこと」を学んだと締めくくった。

全グループの発表後、審査結果が発表され、岐阜大学のグループは奨励賞であった。残念ながら全国大会に駒を進めることはできなかったが、学生たちからは達成感の表情が見て取れた。今回の取り組みやグランプリ出場が、今後の学生生活に良い刺激となることを期待したい。



図 5. 自己紹介

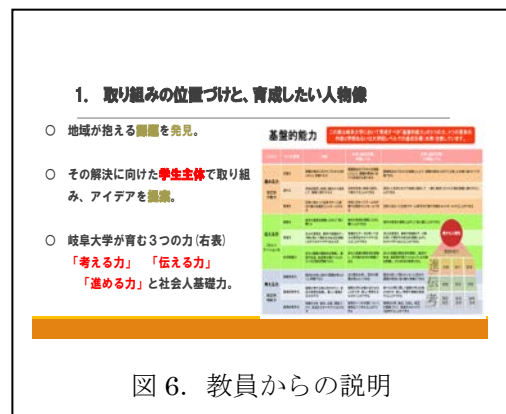


図 6. 教員からの説明

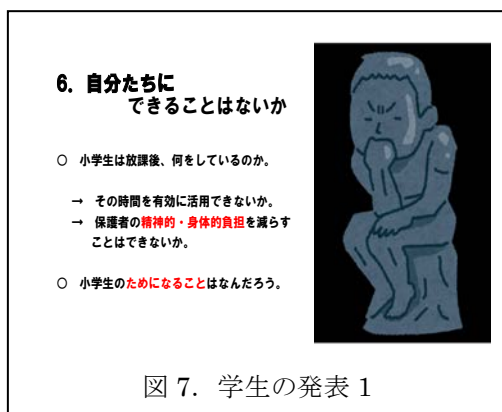


図 7. 学生の発表 1

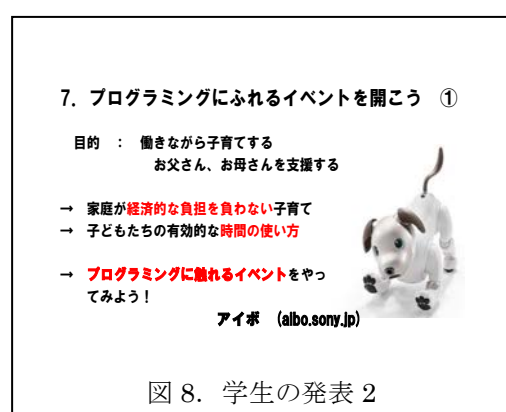


図 8. 学生の発表 2

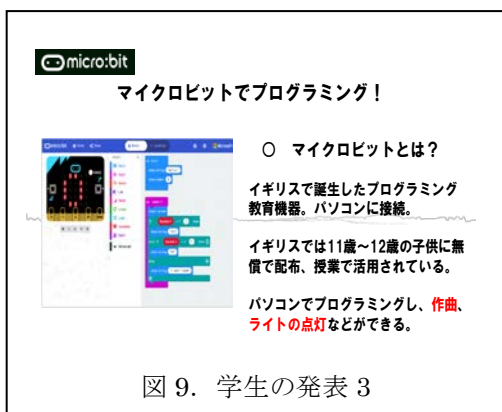


図 9. 学生の発表 3

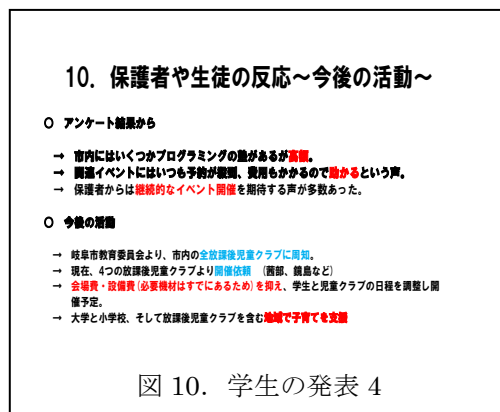


図 10. 学生の発表 4

5. おわりに

一年間の活動を振り返って、何よりも学生の頑張りを評価したいと思う。学業とアルバイトで日々忙しくしている学生が、時間の合間を縫って学生ボラネットの活動に参加し、プログラミングのイベントを開催するまでたどり着くのは相当大変なことである。

その頑張りの裏には、子育てをする家庭の精神的、経済的な負担を軽減、また、小学生たちの有意義な放課後づくりを思う気持ちに、真摯に向き合う姿勢があった。学生ボラネットの活動を始めた当初は、グランプリで良い賞を獲ることが大きな目標であったが、いつしか目標は、「子どもたちが楽しくプログラミングを学ぶにはどうすれば良いのか」へ変わっていったように思う。その過程で、知らず知らずに身についていくのが、本来の「社会人基礎力」なのかもしれない。

最後に今後の展望を記しておきたい。イベント終了後、岐阜市教育委員会を通して、市内の全放課後児童クラブにプログラミング講座への参加募集を呼びかけた。その結果いくつかの放課後児童クラブから依頼があった。学業やアルバイトの関係で全てを受けることはできないが、会場は放課後児童クラブ側で用意して頂き、機材は既存の物を利用することで、できる限り対応していきたいと思う。学生ボラネットは、岐阜大学の異なる学部で学ぶもの同士が集まり、また企業の方の尽力を受けながら、自分たちが取り組みたいことを形にしていく場である。こうした場が、学生の基盤的能力や社会人基礎力の育成に少しでも繋がれば幸いである。

最後に学生ボラネットの活動にご協力頂きました富士通株式会社様にお礼申し上げます。

【参考文献】

1. 社会人基礎力協議会ホームページ

[<https://www.mda.ne.jp/kisoryoku/index.html>]

上記ホームページ中に社会人基礎力そのものについての説明が掲載されている。

(2019年5月25日閲覧確認)

2. 岐阜大学ホームページ「岐阜大学が育成する基盤的能力」

[https://www.gifu-u.ac.jp/campus_life/g_education/base.html]

(2019年5月25日閲覧確認)

3. マイクロビット micro:bit 「マイクロビットを簡単に使うための 5 つのステップ」

[<https://microbit.org/ja/guide/quick/>]

(2019年5月25日閲覧確認)